

近藤 敏¹: 報告—第24回日本植生史学会談話会Satoshi Kondoh¹: Report—The 24th forum of the Japanese Association of Historical Botany

日 時: 2006年6月10日13時~6月11日14時

場 所: 宮城県大崎市鳴子温泉字原75

東北地区国立大学川渡共同セミナーセンター及び
国立大学法人東北大学川渡農場(農学研究科附属複
合生態フィールド教育研究センター)話 題: 「石斧伐採実験のあとを訪ねる」
復元された石斧による伐採実験体験

第24回日本植生史学会談話会が上記の日程で開催された。初日に伐採地見学のため使用を予定した林道が5月の集中豪雨により崩壊したため、見学が11日に変更されたほかは、多少雨天ながらほぼ日程とおりに行なわれた。参加者は講師を含め29名あり、懇親会は盛況であった。

初日の勉強会は、高速道路の事故渋滞があつて、東京からの世話人が多少遅れることもあつて、川渡農場の広大な敷地(2215 ha)をフィールドにされている東北大学大学院農学研究科陶山佳久さんに突然にも講義をお願いした。

内容は、川渡農場の農場森林域の紹介がコンピューターによるスライド映写によって行なわれ、戦中戦後の皆伐を

受けながらも、木材の運搬が困難な沢スジ等の区域では、ブナなどの広葉樹の大木が、農場内にかなり残されている事例を紹介して頂いた。

鈴木三男会長が今回の談話会のテーマである「クリの伐採実験と縄文時代における木材利用」について、2001年からはじめて、今年で6年目に入る川渡農場における実験の概要と現状を説明された。まず9日に川渡農場の伐採実験現場を下見した状況では、林道がかなりの悪路となっており、行程には十分注意が必要なことと、日程及び11日の観察のポイントが述べられた。配布されたプリントは、伐採現場の調査区画の配置図と、「縄文時代の木材利用に関する実験考古学的研究—東北大学川渡農場伐採実験」(工藤雄一郎, 2004, 植生史研究第12巻第1号)である。

伐採実験で設定された調査区は尾根上鞍部、斜面、谷頭に位置している。調査区は10 m四方を単位とし、並列する部分もある(工藤, 2004, 図1)。現状の説明では、調査区を設定するために打ち込んだ基準杭が噛み砕かれ、引き抜かれている。それらの原因はツキノワグマと推測されることなど、見学に際しての予備知識が講演された。



図1 石斧による伐採の心得を指導をする磯部保衛氏。



図 2 石斧で伐倒したスギと伐採に使用した石斧。

続いて野外における伐採実験となり、陶山さんに設定して頂いた緩斜面のスギ林内の目通し直径 25 cm 前後のスギを 4 本? 参加者が代わる代わる石斧で伐採することとなった。

伐採前に鈴木会長と首都大学東京の山田昌久さんが、石斧の柄について説明した後、石斧と柄の製作者である磯部保衛さんが石斧による伐採の心得と技術指導を行い、各自が伐採実験の被験者となった。今回伐採実験に使用した石斧の柄は、佐賀県唐津市菜畑遺跡(縄文時代晩期)出土のものを復元した直柄石斧の柄である。被験者となった私自身の感想では石斧は実に良く伐れ、水を上げているスギは石斧の当たりが良いといい音がして、伐れが実感できた。また、石斧は石斧刃部の石器と木の柄だけではなく、柄の割れを防ぐため、柄と石器の間に緩衝材が必要であり、磯部さんに拠れば、その材質は動物性の毛皮の毛が現段階では良いとされている。

セミナーセンターに戻り、東京都立大学大学院の小林加奈さんが、研究テーマである「磨製石斧」(遺跡出土資料解釈のために実験的方法をもちいる)の伐採実験の調査手法や、調査成果課題について述べた。

11日は霧がかかり小雨模様であった。4WDに分乗して伐採実験現場に大きく迂回しながら1時間半の行程で出発した。幸い大降りにならず無事到着し、6年目にあたる伐採地見学となった。クリの萌芽は多くなく、実生のクリが見られる。日当たりが良くなり、伐採前の林床はほとんど裸地状態だったのが、他の植物が繁茂している状況にある。案内をされた東北大学大学院農学研究科加納研一さんによれば、クリのヒコバエの若芽は、カモンカの食害を受け易いため、積雪の影響もあって成育が悪くなるとのことだった。また、現地に入った感覚では伐採実験区域は里山の条件ではなく奥山であり、人の影響の少ない地域であることも要素としてある。

ノウサギの糞も散見され、林床が明るいところでは、動物の活動も多い。伐採実験場では、石器による伐採とチェーンソーによる伐採の比較実験も行なわれており、これからの経過観察が重要であり、植生変遷も調査対象になることから、現状の観察結果の積み重ねが今後の実験の課題となることを、鈴木会長が強調されていた。悪天候もあり昼食を現地で済ませて帰ることとなった。セミナーセンターでは参加者の集合写真を撮り、また磯部さんのご厚意で伐採実験に使用された石斧一式が、一番遠隔地から参加された杉山真二さんに記念品として贈呈された。

縄文時代研究の中で、生業の「サケマス論」は有名であり、縄文農耕については、イネの存在や焼畑農耕の民俗資料によって現在話題にされている。狩猟採集経済の縄文の森については、マクロ的にはブナ林文化や照葉樹林文化として理解されてきた。しかし物質文化の研究である考古学資料とのすり合わせは、今後の課題である。低湿地の埼玉県寿能遺跡から大量に出土するクリ材を眼にして、鈴木会長が「縄文時代はクリの時代」と話されて、四半世紀が過ぎた。それらの研究成果の積み重ねがあつて、今回の談話会があると思う。

最後になりましたが、今回の談話会には、東北大学大学院農学研究科陶山佳久先生をはじめ、加納研一さんや、川渡農場とセミナーセンターの皆様にはお世話になり、大変ありがとうございました。また今回準備担当の東北大学植物園大山幹成さんにはお世話になりました。記して感謝申し上げます。

(〒290-0011 千葉県市原市能満 1489 番地 市原市埋蔵文化財調査センター)